
Project Product ~ **偽りの世界と未知の病** ~

#3-Baraotome

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Project Product 偽りの世界と未知の病

【Nコード】

N4535M

【作者名】

#3 - Baraotome

【あらすじ】

ふと気が付くと

そこは別の世界だった

幻覚に蝕まれながらも、必死で抵抗する主人公。

こんなことが起きたのは

あの研究プロジェクトからだった！！

主人公視点で伏線を回収しまくる

主人公体感型小説です（謎）

1章 - 01闇の中で（前書き）

国語力がほぼありません。

はじめまして（汗）

誤字、脱字、空間がひろい、棒が多いなどツツコミ所満載ですがこの分かりにくい世界をいろいろと解釈して下さると有り難いです（^ - ^）；

それではどうぞ～

1章 - 01闇の中で

走っている

走っている

そういえばいつから走っていたのだろうか

暗闇の中考える。

真下に伸びる永遠とも言えるこの長い白いラインの上を私は逃げるように走っている。

あの頃から私は変だ

あの研究を始めた頃から……

だめだ……しつかりするんだ
そうしなければまた

またおかしくなるか分かったもんじゃない

時刻を確認しようと左手の腕時計見る。

止まっている

そつ…秒針も長針も短針も全て止まっていた

やっぱり時間が……

ハア ハア ハア……
ようやく……だ

さっきから走っていたのは、線路沿いの道路から駅へたどり着き、時刻を確認するため

それに、時間が止まっているのかこの時計が壊れているのか確かめたかった。

それだけだった。

今の時代には珍しいアナログ式時計だ。

短針は10、長針は4らしき所を指している。

今針が動いたことを考えるとどうやら壊れてはいないらしいが
なにかがおかしい。

もう少し近づく

っっ!!

おかしいのは当たり前だ、すべての文字が左右反対になっている、
しかも1番上には”1”という文字がある。

今まで必死だったから気付かなかったが、周りの看板などの文字、
文字、文字多分逆なのだろう、直ぐには読めるものではなかった。

13時?

一体なんだこれはっっ……

この暗闇の中、一人取り残された感覚が襲ってきた。
ぐっっ

同時に頭痛。

「そう。此処は偽りの世界」

そう、聞こえた。

女の声だった。

1章 - 01闇の中で（後書き）

すいません（^-^；

分かりにくいですねでもこのくらいの方が

主人公体感型小説（謎）

には丁度いいかと…次回作に期待ですねっ！！

それでは

1章 - 02アカネ（前書き）

そういえば忘れていました。

1話でお分かりでしょうが、主人公の台詞には「」が付いておりません。主人公体感型と言うことで主人公視点で色々やっちやいます。見にくいでしょうが、力尽きるまで粘りたいと思っています。

それではどうぞ（＾－＾；

1章 - 02アカネ

だれだっつ

辺りを見渡すも誰もいない。

すると、時計塔の影から少女が現れるのが見えた。

「ここにいれば誰か来ると思っ

た。少女は言った。

「こんばんは…かしら。私はアカネ。ここで私以外初めて人を見たわ」

……私は、

といいかけて、自分の名前が思い出せない事に気付く。

深く考えても頭痛が酷くなるだけだ。

「どうしたの？」

アカネと言う少女が心配そうにしている。

いや大丈夫、思い出せないだけだ。自覚のある記憶喪失なんて珍しいのだがな。

取りあえず聞きたい事があるのだが、いいかな？

「ええ、私でよければ」

ではまず、あの時計はなんだか判るかい？

頭上にある摩訶不思議な時計を指す。

「1番上の”1”とか左右反対とかは置いといて、時間はちゃん

と正しい方へ進んでいるみたい。」

そうか……

それではっ

「待って、立ち話もなんだから座れる場所に行きましょう」

アカネが指差す方向には待合室らしき場所があった。

ふう、

一息つく

だいぶ頭痛もおさまってきた。

では、アカネ…さん？この世界について何か知っていることはないかい？

「んー、私にもよく分からない。文字とかが左右反対になっていることぐらいしか。私もここにはそんなに長くないの」

そうか…まあ情報が無いのは分かった。

すまなかった。今日はもう遅いし、明日また聞くとするよ

そういつて、私とアカネは待合室で夜を明かした。

1章 - 03ナニカ（前書き）

888文字 （空白句読点含む）でお送りします、第3話！！
ついに来ます……これ。

謎の主人公による、厨二病的展開の為の、主人公体感型小説（謎）
が始まります（＾－＾；

1章 - 03ナニカ

朝

ちゃんと日は昇っている。

向かいの席に目をやる。

アカネはまだスヤスヤと寝息を立てている。

時間を確認しようと時計塔へ。

時刻は、6時20分といったところか。

読みづらさには慣れた。しかしながら文字板の頂上には謎の” 1 3 ” という文字が。

取りあえず他に人がいないか探さなければ。なんせ情報が少な過ぎる。

この状況で彼女と離れるのは気が引けるので、できるだけ近場を探そうと駅の外へ

これは……新白ヶ丘市!?

昨日は暗くて分かりづらかったが、ここは新白ヶ丘市そのものだ。看板の文字やなんやらが反転しているのを除いて。

細切れになった記憶でも判る。ここは私が通い、勤めていた学園都市なのだから。

んん??

ふと、黒い何かが視界の端を掠める。

するとそれを待っていたかのように、

何かが、何かが来る

っ

ニタ…

〒

×

¢ゲ£

…ル

§£

まただ、また幻聴が、耳の中が、頭の中がうるさい騒がしい。周りの景色は、呆れるほどこんなに静なのに……

ぐあああああああーっ！……！！！！

〒

×

¢ゲ£

…まだ、続く

ニタ…

〒

×

¢

………

………

止まっていた。

止まった、のか？

気配を感じ後ろを振り返る。アカネの姿がある。何か持っている。杖…か？

「しっかりして！！　今、魔法をかけたから」

ああ…

我ながら情けない。前ならこのくらいの事、たいしたことないはずなんだが

言いかけて気付く。さっきまで忘れていたことが思い出せるそう。

「ん？」

アカネが深刻な顔で首を傾げている。

そう、私の名前：は ミナト。ミナトと呼んでくれ。今、思い出した。それともう大丈夫だ、ありがとう…助かったよ。君は、魔法が使えるんだね？

「え、ええ。それにしても、本当に大丈夫なの？」

ああ、大丈夫…だといいがな

私は彼女にさっきのことを説明するため、もう一度待合室に戻るところにした。

1章 - 04 出発

「本当に大丈夫なの？ 汗とかすごいけど」と言って何かを差し出してくる。

水が入ったペットボトルだ。ラベルの文字は逆だが。

すまない．．．少し説明させてくれないか？

「あなたがよければ．．．私も聞きたかったんだけど、無理はしないでね？」

意外と心配性のようだ。今度からは余り無理をしない方がいいだろう。

落ち着いて聞いてくれるか？

さっきのような幻覚は前にもあったんだ。詳しくはあまり思い出せないんだが、この世界へ来てからも何回かあってな．．．でも、今回ののは少し違う．．．気がするんだ。何か話しかけてくるようなそんな感じがする。

「それって、ミナトの頭上に漂っていた黒い．．．雲（？）のような物とかと関係ある？」

アカネが尋ねてくる。．．．．．近い。

幻覚を見る直前に、私も黒い”モノ”を見た。だから恐らくは、そいつが原因ではないかな．．．

それにしても魔法が使えるんだな。それはとても頼もしい。でもアカネはどこでそれを？

「自分で言うのもなんだけど、私って適応力には自信があるの。なんか 身体にスツと染み込む感じで。」

「だから魔法なんかも得意なんだ。新しい魔法とか自分でたまに思い付くしね。さっきのはただ単に力をぶつけたただけなんだけど」

それでも容量の制限があるんだから、多用は控えたほうがいい

「仕方ない。そうするわ」

そう言っつてやっと待合室の古びた長椅子に腰掛ける。

やっと落ち着いて彼女…アカネを見ることができた。私よりだいぶ若い。学生でなはないだろうか。………そんなことよりも、他に人がいないが探さなくては。ここの情報が欲しい。

アカネ　さん、私は大丈夫です。それより他に人がいないか探しませんか？

そう言っつて私は席を立つ。

「ええ、いいわ。ミナトがよければ。」

アカネも賛成らしく、私と同じように立っていた。

……取りあえず線路沿いを進むことになった。私が走ってきた道だ。暗かった為に何も情報は無い。

戻って何か分かるかもしれないとのことだが、正直言っつて恐ろしい。未踏の処女地に足を踏み入れるのは、相当の勇気がいるのだから。

1章 - 05人影

駅から少し歩いたところで、手分け・・・アカネと適度な距離を保ちながら、周辺区域を人がいないか探している。

ついでだから、さっき取り戻したらしい曖昧な記憶を整理してみる。

私が思い出した記憶は

「研究室にいたこと」

「自分はミナトと名乗っていたこと」

「魔法の研究をしていたこと」

の3つ

とは言っても最近の記憶のほうがい思い出せないから基本的なことは分かる。

たがしかし、どうしてこの世界にいるのか分からない。

誰が？なんのために？どうしてこんなところに？

答えられないのは分かっている、聞けないのも分かっている。

アカネにぶつけたって意味はない。彼女はミカタだ

ミカタ ？

それじゃあ敵がいるのか

アカネは本当にミカタなのか

悪魔が囁いているようだ……頭がガンガンする。

アカネは味方だ。これはきつと、いや必ず大丈夫だ。こんなところ
てじつとしていても仕方が無いのは分かってる。もっと仲間がいる。
元の世界へ戻るためにも。

そう考えていると、黒い影が

またか……っ

さっきのが来ると思い、とっさに身構える。アカネが見当たらない。

黒い影が 消える。

……すると自分の眼前に剣が突き立てられていた。

「貴様」

……
黒い影 もとい人影は話してくる。

「貴様、何だ……人か？」

その前に、剣をどかしてくれ

「ああ。 それよりも貴様、なぜここにいる」

そう言つて正体を明かす。私と同年ぐらいの若い青年だ。ただ
服装は戦場にいたかのようにボロボロになっている黒いローブのよ
うなものを頭から被っていた。

私は聞かれたことが全く分からなかった。

どうゆうことなんだ？

取りあえず聞いてみる。

「覚えていないのか！？あれほどさんざん」必死に話してくる。
しかしながら記憶がない私には何も分からない。

しばらく聞いていると、ふと話しが止まる。

「仕方ない。貴様の記憶が戻るまで仲間になってやる。異論は許さ
ん」

待ってくれ、もうひとり仲間がいるんだ。全員揃ったところで話を
しよう

「仕方ない。……それでどこにいるんだ？」

これが、2人目となる”人”との出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4535m/>

Project Product ~ 偽りの世界と未知の病 ~

2010年10月11日00時37分発行